

Kant における「所有」の法と道徳

浅 田 宏

目 次

- 一. 時代的概観
- 二. 「私のもの」並びに「君のもの」についての法
- 三. 「私のもの」並びに「君のもの」についての道徳

一. 時代的概観

Kant は経済については殆んど述べるところなく、財産制も全く肯定している。当時、イギリスに比べてフランスは、政治、経済、社会上の発展において、はるかに後進国であったが、ドイツはそのフランスよりも更に後進国であった。十八世紀のイギリスは、Puritan、名与両革命（それぞれ1648年と1688年）と産業革命の発祥地たることによって、政治、産業経済、社会上更に科学技術の上において、全ヨーロッパにおいて最も進歩した地位を確立していた。資本も原始的蓄積から本来の資本制蓄積となり、生産者と生産手段の分離が行なわれていた。すでに早くも1725年に最初の近代的恐慌があらわれた程で、階級間の対立があり、私有財産についても批判があらわれていた。産業革命よりも早く、工業でなくして農業における資本主義的生産方法の端緒が目立ちつつあったとき、Thomas More (1478~1535) が、その『Utopia』において、一切の物質財は共同であって、社会的病患の永続的主因は私有財産制度であり、この制度の廃止以外の如何なる治療も、単に不手際なつくろいをなすに過ぎない、と述べて、次のようにいっている。

「すべてこれらのいまわしいもの（豪華な生活をしている者とその反対の者、もろもろの社会的疾患）を絶滅せよ。農場や家屋を毀ったものを強制してこれを再建せしめ、また再び耕作しようとする者に、土地を譲らしめる法律を發布せよ。富者がすべての物を買ひ占め、先買ひ

をしたり市場を支配するのを、認容するな。そんなに多くの人間をのらくらさせておくな。再び農耕を復活し、織物業を再興せしめよ。……いやしくも、あなた方がこれらすべての禍害に対する対策を講じない限り、いくら罪人を極刑に処したところで徒勞である。……」¹⁾

次に十八世紀の代表的思想たる啓蒙思想 (illumination) は、フランスを中心に全ヨーロッパに展開された知的運動であるが、政治、経済、社会上の発展においては、フランスはイギリスよりも五六十年の後進国であった。フランスにおけるイギリス製紡織機の導入は、どこの国よりも早く、絶対主義官僚あるいは市の援助のもとに行なわれたが、フランス革命 (1769~) のはじまるほんの少し前には、ノルマンディをきっかけに、リヨン、ミュールなどで導入された程度である。

ancien régime の打倒を旗印とした急進的な大革命も、経済上の変革ことに私有財産制の変革に手をそめることは少なかった。ただ革命のさ中に (従って Kant 在世中に)、Babyl (1709~85)、Morelly (不詳、18世紀中葉) や Babeaf (1760~97) らの共産主義者がいた。Morelly は、その『詩篇』(Bassiliadedu) の中で、「私有財産はあらゆる罪惡の母である」といい、『自然法典』(code de la nature) の中で、「宇宙における唯一の惡徳は貪欲である。私益は社会の普遍的疫病、慢性的熱病、結核的病源である」といっている。また、急進的な秘密団体 Egaux 会の指導者 Babeaf は、共産主義政府の樹立をもって、革命を完成する最後の革命であると考えていた。彼は革命が発生するや『Tribun de peuple』を編集して、革命の敵 ancien regime は勿論、Jacobins の巨頭 Robespierre の恐怖政治にはげしく攻撃を加えた

め、反逆罪として逮捕処刑された。これら一群のものの活動にもかかわらず、大革命の主力は政治上社会上の革命にとどまった。

さて当時ドイツの事情はどうであったか。ドイツはフランスよりも更に後れて農業が中心であった。イギリスでは、1760年頃から、産業革命と並行して、農業革命が近代的に行なわれていたが、ドイツにあっては、ゲルマン内の各王侯国によって多少の相違はあるにしても、Kant 時代には農業が殆んど未だ中世的の状況にとどまっていた。河野・飯野両氏の『世界資本主義の形成』²⁹によると、農業の発展を、1) 穀物+野草、2) 穀物+栽培牧草、3) 穀物+栽培牧草+根菜作物、の三段階に分けている。ドイツにおける牧草段階への移行は十八世紀の中頃で、フランスとほぼ同じであったが、根菜段階に入ることは、フランスよりも約二十年おくれている。Kant 時代は農奴身分からの解放も共同地の分割も未だ行なわれていない。規模も中世的な小規模農業であった。殊に西欧より遠いプロシヤにおいては穀物中心であり、彼が生涯そこを出なかった東プロシヤはプロシヤの穀倉地帯とされていた。遙かなる西からの風はそこまで吹き及ばなかったわけである。プロシヤは都市においても中世の名残り強く、社会生活において手工業渡世が重要な役割をなして居り、その手工業者は、厳格な「仲間組合」の拘束と保証のもとに生活していた。大工業組織においてイギリスの産業革命が本格的な展開期を迎えるまで、中部ドイツ最大の領邦 Saxen はこういう古い組織の下における綿織物の一大中心地であったが、十八世紀末 (Kant の極く晩年) に、この綿工業がイギリス産業革命の影響を真正面から受けて、存亡の危機に直面した程であった。Saxen への紡織機の導入はようやく1785年 (Kant 62才) で、これから、ドイツにおいても産業革命が進行して行ったわけである。

社会的にも、王侯・貴族・僧侶・地主・小作農・農奴・手工業などの区別もそのまま残存していた。政治的についていうと、統一ドイツは未だ実現して居らず、Saxen, Preuszen その他多数の領邦王侯国が並存していた。祖国プロシヤという意識はあっても、祖国ドイツという意識は未だ存在しなかった。ことにプロシヤは、Kant 当時は、

富国強兵策に孜々として献身した Friedrich 大王治世四十余年のもとにあり、国民は政治的社会的産業的後進国にもかかわらず、みずからに甘んじていた。外敵に対する守りには王制の方が強固であるとさえ Kant はいっている。またそこには、資本はあっても、近代的な意味の蓄積資本はなく、財貨の私有については、伝統を当然のこととして、疑いをいれるものがなかったのである。このことは、もともとドイツ国民は忠誠的であるとともに、内面的倫理的堅実であって、社会的政治的経済的であった英仏の国民性と異なることによるのであるが、ことに Kant はそうであった。Kant は Friedrich 大王治下のプロシヤに啓蒙の精神が具現されているとさえ考えていた。彼自身はその愛するプロシヤの政治、社会、経済の regime には非議するところがなかった。

Kant を研究し相互に文通もあった Schiller³⁰ は Kant について次のようにいっている。

Luther についてと同じように、Kant については、つねに或るものがつきまとっている。それは、なるほど修道院を立ち去ったが、修道院の痕跡を完全には脱しきっていない修道士を、人々に思い出させる何かそういうところがある、ということである。

「壊れし屋」ともいいうるほど思想的に、伝統的なものを否定し、フランス革命に同情して人々から Jacobins と呼ばれたほどの革進的な表面の裏に、ancien regime 的色調がこびりついている一面が残存していることを感ぜざるをえない。政治体制は共和体制でなければならないと強調しつつも、富国強兵策に献身していた Friedrich 大王の専制に対し忠誠をささげつづけた点がそうである。それからフランス革命を思想的に肯定しつつも、上からの官製革命ををいっているし、身分制には別に言及するところがない。のみか、召使いや日雇い労働者を自由市民から除外することすら述べている³¹。このことも彼の倫理観と矛盾する。Platon がその『Politeia』で否定した私有財産を問題にしなかった。所有権というものは、現実的には、歴史的形態をとって、一定の社会的諸関係のうちに、また一定の社会的関係として存在してきたし、また存在している。「私のもの」であるものは「君のものでありえず」、「君のもの」は「私のもの」

でありえない。Kant の時代にフランスにおいては、前に述べたように、私有財産はあらゆる罪惡の母であるとか、共産主義革命こそフランス革命の完成である、といった激しい運動的思想家が出た程であるのに、一切の伝統を批判した Kant の主張は、後に述べるような、思想的な分配的正義にとどまった。更に彼は、妻、子、或いは従僕を戸主のものと考えた。「私のもの」及び「君のもの」は、「従物はそれ自身の主物に従う *accessorium sequitur suum principale*」という法則に従った⁵⁾。奴隷いもこれを物件と考えた⁶⁾。彼にしてこのようなことは、われわれの理解に苦しむところである。

註 1) 岩波文庫、ユートピア；30頁～

Karl Kautsky；『トーマス・モアとそのユートピア』訳本 p. 344.

2) 河野、飯野『世界資本主義の形成』31頁.

3) 1794年6月13日 Kant にあてた手紙、1759年3月30日 Schiller にあてた手紙.

4) Akademie 版全集, Bd. VIII, Theorie u. Praxis, s. 295.

5) Bd. VI, Rechtslehre, s. 269.

6) *ibid.*, s. 336.

二. 「私のもの」並びに「君のもの」 についての法

Kant の法哲学の構成はローマ法のそれに従っている。その原理は正義観念である。Cicero は、正義は最高の徳であり、他の一切のものを含むだろうと信じた¹⁾。このローマ法は、人間行為の外面的可能性の全域をおおってはいなかったけれども、当時の時代的思想の多くの問題につながりをもち、その理論構成に充用しうることを、Kant は認識したからである。そして彼の哲学体系とローマの実定法との無矛盾に苦心したけれども、その説明には無理があったことは否定されえない。

Kant は *Eigentum* という語も使用しているが、特に、[*Mein und Dein*]²⁾ という彼の特別の観念を用いて、所有をあらわしている。そしてこの [Mein u. Dein] に、法的な財産観念よりは広い意味をもたせている。財産（そのうち特に貨幣）は、商品として交換しうるので、社会的性質をもっているわけだが、一面個人の意志に服する私的存在である。Kant は特に十八世紀的な私的性質

を中心にする。

Kant はいう。「法的に私のもの」(*Das rechtlich Meine*) とは、かりに誰か他人が私の同意なしに、それを使用するようなことがあるとすれば、そういう使用が私を侵害することになるというようなぐあいには、私がそれと結びついているところのものである。³⁾ 他のところでは、「私のもの」並びに「君のもの」に外的なという形容詞をつけていう。「外的な私のものとは、私がそれを任意に使用しようとするとき、そうしようとする私を妨げることが、侵害（ある普遍的な法則に照らしてみても、万人の自由と両立しうる私の自由の毀損）となるであろうような、私の外なるもの（傍点筆者）である。」⁴⁾

外的な事物が「私のもの」たるためには、それが事実上私の手の中にないときに、他人が使用することによって、私が害を受けることが可能であることを仮定せねばならぬ。従ってこのことから Kant は、所有という語に二つの意味を包含させていたことが考えられる。一つは、感覚に認識される感覚的乃至物理的所有の意である。今一つは、ただ知性によって認めうるところの合理的あるいは法的所有である。第一の意味の所有は経験的所有であり、第二の意味のそれは合理的あるいは可想的な所有を意味する。合理的所有は、物理的把握もしくは引き留め（拘禁）から離れて考えられる所有である。

経験的占有、即ち意志の自由使用の範囲内にあるあらゆる事物が、客観的に「私のもの」「君のもの」たりうことは簡単に理解できる。従って、ものが「私のもの」として認定されるためには、私はそれを何らかの種類の保持 (*Inhabung*) をしていなければならない。しかし外的な事物が如何にして「私のもの」「君のもの」として可能であるか。Kant はここで彼自身の哲学を引用してくるのであるが、その説明は誠に困難な説明である。彼は、経験的占有に関する *a priori* な諸命題は分析的であるという。というのは、こういう諸命題は、矛盾律に基づいて、例えば（私の手からリンゴをひったく場合のように）自由な私のもの（つまり私の自由）に作用して、これを侵害したがつて彼の格率において、法の公理と真正面に矛盾することになるからである。それゆえ、経

験的な適法的占有についての命題は、或る人格のその人格自身に関する権利を超え出るものではない。

これに反して、可想的占有 (Kant はこれを純然と法的な占有⁵⁾、ともいいかえている) は総合的である。総合命題の述語は、主語の中に含まれていない。そして他の根拠からひき出されねばならない。合理的占有に関する命題は、物理的所有のない所有を述べ、それゆえ主語を超えて経験に言及するゆえに、総合的である、という。では更につき進んで如何にしてこの a priori が可能であるか。

Kant のこの問題に答える試みは、土地の**原始的共有** (ursprüngliche Gemeinschaft, communio fundi originaria) という重要な思想に彼をひちびいた⁶⁾。物件の最初の取得は土地以外の何でもありえない、というのが彼の思想である⁷⁾。Kant の原始的共有の思想は、彼が仮構 (Erdichtung) と考えた**原始的共有** (uranfänglichen G., communio primaeva) の思想とは区別される。地表の根源的な占有 (ursprünglich gemeinsame Besitz) は最初の占有獲得 (erste Besitznehmung) の権原 (Rechtsgrund, stimulus possessionis) である。即ち地表の或る部分の最初の所有者は、そう主張する権利を、地表の共同所有という本有権利 (angeborene Recht) に基づけるのである、と Kant は論じる。そして、それに a priori に対応するところの**普遍意志** (a priori entsprechenden allgemeinen Wille) に基づけると論じる。そうしてそのことが土地の私有を許すのである。もしそうでなければ、自由は、使用しうる事物を使用の可能性のそとにおくことによって、有意的活動の使用を自ら奪うことになるであろう。それは事物を無主物 (herrenlosen Dingen, res nullius) とらしめることによって、事物を無にしてしまうだろう⁸⁾。このようにして、一人の最初の専用者が、原始的に最初の所有によって、その土地の特殊な部分を取得するのである。この種の占有の可能性は、したがって、非経験的、合理的 (本体的) 占有という概念の演繹は、「**外的なもの (使用しうるもの)** が、誰にとっても自分のものたりうることを念頭におきつつ、他人に対して行為することは、法義務である」という実践理性の法的要請⁹⁾に基づい

ているのである。

第一の所有を Kant は、**感覚的占有** (der sinnlichen Besitz) あるいは**経験的所有** (empirische Besitz od. Inhabung) 若くは現象における占有 (Besitz in der Erscheinung, possessio phaenomenon) と呼び、第二の所有を**可想的占有** (ein intelligibler B., possessio noumenon) による所有ともよぶ¹⁰⁾。第一の占有は、空間のなかの、または時間のなかの、ある別の位置にあるものであり、第二の占有は、単に私 (という) 主体から**区別されたもの**というだけの意味においてのもの、所持 (Inhabung) をともなわない占有である。

そして Kant は主張する。あらゆる事物を客観的に「私のもの」あるいは「君のもの」としてこれを措定することは、実践理性の a priori である¹¹⁾。彼はこの要請を実践理性の「**許容の原理**」(Erlaubnisgesetz, lex permissiva) と名づける。それは、権利一般の単なる観念からは演繹されえない特別の権利をわれわれに与えるからである。即ち、最初に占有したものは、その占有を許容され、他の人々に対して或る拘束性を課する権能を得る。即ち他の人々は、その使用をさし控えるべきだという拘束性が生じる。これが、実践理性の a priori な許容法則の要請である。

上の理論にもとづいて、私の選択意志の外的な諸対象たりうるものは、ただ三つだけであると Kant はいう¹²⁾。第一は私にとって外的な有形の事物、第二に、或る特定の行為への或る他人の選択意志、第三に、私自身との関係における他人の状態。第一のものは実体のカテゴリーに、第二のものは原因性のカテゴリーに、第三のものは、自由の諸法則にもとづく私と外的な諸対象との間の相互性のカテゴリーに従う。

Kant はその各々について次のように説明している。第一、私が空間のなかの或る対象 (或る有形の物件) を私のものと呼びうるのは、私がたとえその対象を物理的に占有していなくても、それにもかかわらず、或る別の現実的な (従って非物理的な) 仕方で、その対象を占有していると主張することを許される場合のほかはない。たとえば、私が一つのリンゴを私のものと呼ぶことがあるとすれば、それは、私がそのリンゴを私の手の中にもっている (物理的に占有している) からではな

くして、私が、たとえそのリンゴを手放してどこへおいたにせよ、それを占有している、という場合だけであろう。第二に、他人の選択意志によって或るものが給付されることを、私が私のものと呼びうるのは、私が単にこういいうるにすぎない場合、すなわち、この給付が彼の約定と同時に私の占有に帰したといいうるにすぎない場合ではなくして、私がこう主張することを許される場合、すなわち、たとえ給付の時期は将来のこととして約定せられているにすぎないにしても、私は（他人を給付へと規定すべく）他人の選択意志を占有していると主張することを許される場合だけである。それゆえ、いずれ給付するであろうという他人の約定は、たとえ私がこのものをまだ占有していなくても、私のものに算入することができる。第三に、私が妻、子、僕婢を、そして一般に或る他の人格を、私のものと呼びうるのは、私がいま、私の世帯に属し彼らを私の権力下において命令しているからという理由によるのではなくして、彼らがどこにいるにせよ、私の単なる意志によって、従って純然と法的に占有しているといいうる場合に、私は彼らを私のものと呼びうるのである。それゆえ、私がそういう主張をなしうる場合にのみ、またその限りにおいてのみ、彼らは私の資産の一部分をなすのである。

はじめに一言述べたように、Kant 独特の「私のもの」「君のもの」という概念が、普通の資産乃至所有 (Eigentum) よりも広い内容をもっている。それは、上に述べた第二のところでは、他人に特定の行為の行使を約束せしめていることは、その行使の時期が未だ来なくても、私は他人の意志を所有している、といいうる。従ってそれは所有権の一つであるというのである。また上の第三の場合にのべたように、妻、子、僕婢を私のもの（私の財産）の中に包含せしめている。これは彼の定言命令に矛盾する彼の古さを物語る一つの点でもあろう。それから、外的 (auszer) という言葉は、私が居るところより以外のところに存在するという意味を荷なわない。私自身より異なった事物を意味する。更に彼が「私」というその主体が、彼の「自我」を意味していることから、自我と一体である自分の身体をも、物質として、「私のもの」の中に入れていいる。Kant が外的なものを「私の

もの」としてもっているということは、主体の意志と事物とが、空間・時間における経験的關係をはなれて、特別に法的につながって居り、合理的な所有の観念に相応しているところに存する。しかし、Kant がこのように財産観念を拡張したことは、Kant の註釈者を困らせた点であり、彼の思想の欠陥の一つである。近代の所有権の本質の一つは、所有ということは、専ら、人と物質との関係として構成せられ、人と人との関係たる他の諸権利（たとえば債権や、親族法上のいわゆる身分権や、あるいは団体法上の諸権利など）に対立させているのであるが¹³⁾、Kant の意味するところは、これよりも拡張して解釈しているのである。

それにしても、Kant の上の分析はまことに鋭い。所有権の定義をして、「物を彼自身によって使用する権利」とか、「物につき一般の支配をなす権利」とするのみでは不充分であって、例えば、ドイツ歴史法学派の Savigny (1779~1861) のしたように、「物に対する人間の制限されない排他的な支配」¹⁴⁾ としなければならない。排他的ないし専有ということは、近代以後の法思想の中心思想となっている。そこには、近代以後における自由の思想が貫流して居り、所有権の私的性質が一貫しているのである。ことに、Kant の時代における啓蒙期の自然法理論の「自然状態における所有権」という理論構成は、そのような時代における所有権の私的性質の理想型であった。これはまた、ローマの所有権の法律構成の継承でもあった。

註 1) Cicero, ; De finibus bonorum et malorum, 5, 65.

2) Bd. VI, Rechtslehre, s. 245 ff.

3) ibid, s. 245.

4) ibid, s. 249.

5) ibid.

6) ibid, s. 251.

7) ibid. s. 261~2

8) ibid, s. 250.

9) ibid, s. 246.

10) ibid, s. 245 u. 249.

11) ibid, s. 247.

12) ibid, s. 247.

13) 川島武宜；所有権法の理論，3頁

14) Savigny; System des heutigen römischen Rechts, I, s. 367~8.

三. 「私のもの」並びに「君のもの」 についての道徳

Kant 哲学は理性の原理の体系であり、その法律論は、彼の倫理体系を法の領域に適用したものである。一般に道徳は法に先だつものであり、法を可能ならしめるものは道徳である。Kant の目的は、神学、経験的心理学、物理学から完全に離れた道徳の形而上学の樹立にあった。そして、その結果を一言にいうならば、『人倫の形而上学の基礎づけ』にいられている次の思想である。

「この世界においても、またそのそとにおいても、制限なく善とよばれるものは、善き意志 (guter Wille) のほかにない。」¹⁾

意志によってわれわれは、感覚や知性が到達しえない目標たる現実 (Realität) に到達しうる。また意志を中心とするわれわれの理性は、物自体や経験を超えたる価値の世界に「Sollen」の世界に入りうる。

このような自我にして、それ自体を目的とする自己目的的なものとなりうる。道徳法の主体たる人間は、その本質において自己目的であって、決して手段として見なさるべきものではない。更に厳密にいうならば、人間は理性的存在としてのほかに感性的存在でもあるが、人間の尊厳は、その理性的えい知的存在たるところにある。物質や身体につながる傾向性は、人格性即ちえい知的性格から除外される。人間におけるもろもろの欲情は相対的価値を有するにすぎず、絶対的価値を有するものは純乎たるえい知の理性的性格のみにある。このように、自我を純粋に厳密に考えるとところに、次の、彼の有名な定言命令がある。

「君の人格及び他のあらゆるものの人格における人間性を、常に同時に目的として取り扱ひ、決して単に手段としてのみ取り扱わぬようにせよ。」²⁾

彼が「私のもの」「君のもの」というその「私」「君」という主体は、その身体を、私のもの、君のものとして、「私」「君」という主体より除外するのみならず、心のなかにあっても、傾向性をも除外するほど、「私」「君」という主体は純粋なものである。

このように、理性的自我を至上とする Kant は、

物質の世界を如何ように考えたであろうか。財貨の位置づけは、その『法論の形而上学的基礎論』(略して法哲学) において端的にあらわされている。

理性的自我を近代的に権利としてみると、人間の権利の最高分類は天賦権 (angeborene Recht) と取得権 (erworbene R.) との二つである³⁾。天賦権とは生得・内的な従って「私」「君」自体であり、生得権とは後天的な、したがってつねに「私」「君」の取得すべき外的なものである。天賦権は、自由、平等、独立という三つの属性をもつ。取得権は、天賦権が成り立つために、天賦権の機能の実現に必要とされる権利であって、結局「所有」 (Besitz) ということである。つまり Kant にあっては、最高の自己目的とさるべきは自我であり、人格であって、所有ということはあくまでも手段的価値である。このように彼は「幸福原理」 (Endämönie) を至上とせず、しかし否定もせず、「内的立法の自由原理」 (Eleutheronomie) の下位においた。

手段的財貨は、より高い目的価値につながる限りにおいて価値を有する。土地の価値は、最高価値たる人間に何らかの意味でつながってこそ意味がある。Kant が無主物 (res nullius) を否定するのは、物質における手段的価値を認めるからである。小判の価値も猫にとっては玩具に終る。書物の如きも、人間の本質的価値を何らかの意味で高め新たにする限りにおいて価値があるのであって、単に並べておくのは、紙くずとさして変わるところがない。

この手段的価値は、経済学でのいわゆる「効用」 (Nutzen) とも全く平等ではない。使用価値をもつ点は共通しているけれども、差異は第一に、効用は財貨が欲望充足のために消費されることをいうのであるが、Kant のいう手段的価値は、より狭くして、「欲望充足のために」という意味のみを含まない。即ち、より高い自我につながる消費的価値を有するものでなければならない。第二に、効用は主観的満足の度合いであるが、Kant の手段的財貨は客観性をもつべきものである。また Kant は、人間の身体をも「私のもの」「君のもの」としてあげているが、身体も、この二つの点につながる限り価値があるのであって、然らざるとき

は、単なる肉塊（にくかい）であり物質である。またそれ自体としては、非感覚的な、欲望というような所有物も、それが媒介となって、より高いものにつながる限り、価値をもつが、そうでなければ、単なる動物性に墮することになるであろう。

手段的価値ということは、使用的価値ということであるから、使用しない、蓄財自体を目的とすることは否定される。Kant は、蓄財自体に対する欲情を「所有欲」(Ehrsucht) という⁴⁾。彼は『人間学』で、欲情（仏教語の煩惱に相当する）を、自然的傾向性のそれと、人間の文化から生じた欲情との二つに分け⁵⁾、前者の熱い欲情に対して、後者を冷たい欲情といている。というのは、後者に、名与欲、支配欲とともに所有欲があり、これらは冷静な感情を中心としているからである。そして所有欲については詳しく述べている。金銭について述べたところで、彼も、彼すら、「地獄の沙汰も金次第」(Geld ist die Losung) という⁶⁾。もともと金銭という媒介物は、人間の勤勉の結果を、したがってまた、あらゆる自然的財貨を人間の間で取り引きするのに役立つよりほかには、何の効用をももたぬ（少なくとも持ってはならぬ）ものである。金銭そのものは手段として必要なものであるが、それが正当に位置づけられぬところに批判される。この媒介物が発明せられて、それが特に金属により代表された後では、それ自体が所有欲の対象となった。『人間学』において無記であるとしたこの所有欲の適度でないものを、彼は『徳論の形而上学的基础、——略して道德哲学』(Metaphysische Anfangsgründe der Tugendlehre) で、特に貪欲（とんよく Geize）の名の下に論述している。貪欲を、欲ばる貪欲 habstüchtigen Geiz）即ち、ゆたかに暮らすための手段の獲得を本当に必要な制限を超えて抛大する、という意味に解さない。というのは、欲ばる貪欲であれば、他人に対する親切の義務の単なる毀損としてもみることができるからである。それはまた、物惜しみする貪欲 (kargen Geiz) を意味するのではない。それは、恥ずべき場合としては、吝嗇（りんしょく Knickerei）とか、しみったれ (Knauserie) とか呼ばれる。むしろここで貪欲という意味は、豊かに暮らすための手段を自分自身が享受するのを、自分が本当に必要とする限度以下に緊

縮することである。換言すれば、享樂することなく単に所有するだけで、あらゆる使用を断念することによってすら、他のあらゆるものの欠乏を補なうに充分と信ぜられるような力をもつに至ったのが吝嗇なのである。この意味の貪欲に至って、金銭の意味を忘れたもの、即ち、他人に対するとともに自分自身に対する義務に反することになる。金銭を意のままに従ええなからである。所有欲そのものは批判されないけれども、この種の貪欲に至ると非難される。Kant は、三つの冷たい欲望のうち、名与欲は憎まれ、支配欲は恐れられるが、所有欲は己れ自身を軽べつされるものたらしめるといふ。もっとも、市井的な意味では、あるいは功利主義においては、嘆美されるかも知れぬが、Kant 的な道徳的な意味では軽べつされるわけである。このような欲望はとくに老人につきまとう。

Kant は、浪費と貪欲との間に、アリストテレス的中道の原則が役に立たないことを、次のように立論する。

浪費（欲ばる貪欲の格率）は、豊かな生活のあらゆる手段を、享樂をめざして獲得し保持することである。これに対して、物惜しみする貪欲の格率は、享樂が目的なのではなくして、ただ所有のみが目的である。それゆえ、後者の悪徳の特徴は、自分から快適な生活の享受を奪うという制限がつけられている。このことは、目的に関して自分自身の義務に真向から対立するものである。それゆえ、浪費と物惜しみとは、程度によってではなく、相対立する格率によって、特別の仕方でも相互に区別されるのである⁷⁾。

以上述べたところは、所有についての価値的位置づけであるが、所有についての第二の点は、平凡な言葉ながら、額（ひたい）に汗して（努力して）獲得すべきである、ということである。人びとは自分で（合法的に）獲得する快樂は二倍に感じられるものである⁸⁾。——まずは儲け（もうけ）として、それからまた更には手がら（自分がその創始者であるという内的な自讃）としてである。勤労によってえた金は喜びを与え、少なくともその喜びは、賭（かけ）ごとでえた金の場合よりも永続きする。労働自体は何ゆえ生を享樂する最良の方法であるのか。それは、労働はやっかいな（そ

れ自体としては屢々不快適であり、ただその成果によって楽しませる) 仕事であり、また労働後の休息は、長い労苦がただ消滅したということによって、感知しうる快となり喜びの生活となるものだからである。そうでなければ、労働は何ら享樂しうるものとはならないであろう。Kant は早起きをすすめるが、それは、仕事というものは、夜間の休養で元気づけられ、いわば生れ変わった人間となるからである。

労働によって、普通、一切の物品を代表し、一切の諸物件のなかで最高の有用性を有する一個の手段たる貨幣を獲得することになるが、それは、貨幣そのものが、甚大な労働の結果であるからである。従って Kant はいう。銀行券や不換紙幣は貨幣に比して価値が少ない。というのは、それらはたとえ一時期を通じて貨幣の代わりをつとめるにしても、貨幣とは見なされえない。なぜなら、それらを製作するには、少しの労働しか費やさず、そして、それらのものの価値は、単にそれを現金に換えるという従来は成功していたことが将来も継続するという意見にもとづくのであるが、こういう意見は、現金が容易かつ確実な取引関係に充分なだけ多量には現存しないということが万一発見された場合には、突如として消滅し、貨幣の代わりをすることができなくなるわけである。これが Kant の意見であった。現代の不換紙幣ないし銀行券も、本質的には、貨幣をあらわしているものという性質のものである⁹⁹⁾。

勤勉によって所有(財貨)を獲得すべきであるという考え方は、僥倖(ぎょうこう)による所有を否定する。当時あったところの宝堀り人や錬金術師や富くじを Kant は斥ける。そういうものにだまされるのは、だまされる人々の愚鈍に帰せらるべきものではなくして、彼らの悪い意志、つまり相当な自分の努力によらずして、他人のギセイにおいて富裕になろうとする悪い意志に帰せらるべきものであると彼はいう¹⁰⁰⁾。

もっとも Kant は、カルタ遊び、将棋等の勝負ごとを楽しむことは、気晴らし、保養、社交の一手段として、これを肯定している¹⁰¹⁾。Kant 自身カルタ遊びが上手であった。

ドイツ的に自らは勤勉そのものであった Kant は、特に勤勉の必要を詳細に述べてはいない。し

かし、彼が簡単に述べた「額に汗して」ということは、職業倫理の中心たることを失なわないであろう。

所有についての第三のことは、その量であって、必要な程度を限度とするということである。Kant のみならず、自由とともに平等をといた啓蒙の思想家たちは、みなその思想をもっていたが、そのうち、「大地と人間以下のすべての被造物はすべての人々の共有物であるが、しかしすべての人間は、自分自身の身体(Person)に対する所有権をもつ」¹⁰²⁾という Kant と共通の思想家 Locke の次の言説は、最もよくこれをあらわしている。

人間の身体の労働とその手の働らきは、まさしく彼のものといってよい。共有であるものの一部をとり、それを、自然が放置したままの状態からとり去ることによって、所有権が生じる。しかし自然法によれば、所有権は無制限ではない。ものが損なわれないうちに、生活の何かの便宜のために人が利用できる限り、誰でも自分の労働によって、所有権を定めてよいのである。これを超過するものは、すべて彼の分け前以上のものであり、他人のものなのである。このように、労働によってわれわれに所有権を与える。その同じ自然法が、その所有権の限界を定めているのである。そして今日、所有権の主要な物件は、大地の果実や大地にはぐくまれる動物ではなく、他のすべてのものを収容し支えている大地それ自体なのである。しかし彼の考えるところでは、明らかに、大地の所有権も、また果実や動物と同様に獲得される。一人の人間が耕やし、植え、改良し、栽培し、そしてその収穫物を利用しうるだけの土地、それだけが彼の所有物である。彼は労働によって、それだけの土地を、共有地から、いわば「囲いこむ」(enclose)のである¹⁰³⁾。

Locke は、土地の私有の起源と限界をこのようにとくのである。

Kant も、さきに述べたように、天賦権とともに取得権(所有権)を自然権の原本的なものとした。そして彼はいう。

「自然権をもって、……かれらの交互的取引において妥当する正義(iustitia commutativa)ばかりでなく、分配的正義(iustitia distributiva)

もまた、これが判決を下さねばならぬことが、この法則にしたがって先天的に認識されうる限り、同様に自然法に属する。』¹⁴⁾

正義とは彼によれば、自由の普遍的法則によって、一人の意志が他の人々の意志と調和する限りにおける条件の全体から成立している、ということである。このことは当然、分配の平等を含む。政治的人間的自由平等は、経済上の同等なくしては成り立たないと、Kant は主張する。この主張において、Kant は社会主義にはるかに踏み込んでいるといってよい。彼のこのような思想のゆえに、例えば Cohen に、Kantこそドイツ社会主義の真実なる創始者である、といわれ、また社会主義者 Jean Jaurès によってすら、社会主義の真の起源は、Hegel 極左の唯物論にでなくして、Kant その他の観念論に求むべきである、といわれる所以がある。Kant と社会主義の問題については、改めて書いてみたい。

そして、自然法による取得が暫定的 (provisorisch) であるに対し、それが、公民法によって決

定的 (peremptorisch) になるのである。自然状態 (status naturale) における「私のもの」「君のもの」という状態が、公民的状态 (status civilis) のもとにおいて、法的に分配的正義が実現されるのである¹⁵⁾。

註 1) Bd. IV, s. 393.

2) ibid, s. 429.

3) Bd. VI, Rechtslehre, s. 237.

4) Bd. VII, Anthropologie, s. 272.

5) ibid, s. 268.

6) ibid, s. 274.

7) Bd. VI, Tugendlehre, s. 432~3.

8) Bd. VII, Anth., s. 238.

9) Bd. VI, Rechtslehre, s. 287~8.

10) Bd. VII, Anth., s. 205.

11) Bd. XV, Reflexionen zur Anth., s. 381, s. 523.

12) Locke; Two Treatises of Government, Chap. 5, § 27.

13) ibid, § 28~32

14) Bd. VI, Rechtslehre, s. 296~7.

15) ibid, s. 306.